「見せかけの敬虔――人ではなく、神の御前に生きる」

ルカ 20:45-47

2020.9.20 南与力町教会朝拝

序：律法学者の生き方に陥らないようにという弟子たちへの警告

20 章ではこれまでイエス様と敵対者との論争が続いてきました。最後にイエス様の方から彼ら（律法学者たち）に質問をし、彼らのメシア理解が不十分であることを指摘なさいました。そこで論争としては終わっています。

それに続く今日の箇所でイエス様は律法学者の振る舞い、生き方について批判なさっています。しかし律法学者たち本人に向かって語られているのではありません。45 節には「民衆が皆聞いているとき、イエスは弟子たちに言われた」とあります。イエス様は「弟子たちに」言われたのです。そして 46 節で「律法学者に気をつけなさい」と言われます。イエス様はご自分の弟子たちが律法学者たちのような生き方、振る舞いに陥ってしまわないように気を付けなさい、警戒しなさいとおっしゃっているのです。逆に言えば、イエス様の弟子たち、すなわちキリスト者も律法学者のような生き方や振る舞いに陥ってしまう危険がある、ということです。それゆえ私たちはこの教えを自分自身の生き方や振る舞いの警告として心して聞く必要があります。

①律法学者の生き方

イエス様がここで言及しておられる律法学者とは、旧約聖書を専門的に研究し、それを解釈し、民衆に教えていた人々です。律法学者になるには高名なラビの弟子となり、律法とその伝承を学ぶ必要がありました。そして優秀な成績を収めた者のみが「律法学者」としての按手を受け、その資格を得ることができたです。高名な律法学者には多くの弟子がおり、ユダヤ教の「最高法院」サンヘドリンの構成メンバーともなっていました。それゆえ律法学者の社会的な地位は高く、人々から尊敬される存在でした。しかしイエス様はその律法学者に気をつけなさい、警戒しなさいと弟子たちにと言われるのです。なぜでしょうか。46 節では次のように言われています。

「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣をまとって歩き回りたがり、また、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む。」

まず「彼らは長い衣をまとって歩き回りたがる」と言われています。当時「すその長い衣」は律法学者のトレードマーク、ステイタスシンボルとなっていました。それを着て歩き回れば、周りの人から「あぁ、あの人は律法学者だ」とすぐにわかるのです。そのように彼らは自分が律法学者という地位にあることをアピールするために、長い衣をまとって歩き回りたがったのです。

さらに彼らは「広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む」と言われています。当時「広場」は多くの人が集まり、売り買いや弁論が行われる中心的な場所でした。そこで挨拶されることを彼らは好みました。それはただの挨拶のではなく、「先生」とか「我が主よ」と言った尊敬を込めた挨拶です。また彼らは安息日に礼拝をささげる「会堂」で「上席（じょうせき）」、すなわち最も名誉ある席に着くことを好みました。宴会や食事の席でも、彼らは「上座（かみざ）」、最も上位の席に着くことを好み、愛したのです。そのように彼らは社会生活、宗教生活、また宴会という交わりの場でも、人々から誉れや尊敬を受けることを好み、愛していた。イエス様は彼らのそのような傾向を見抜き、指摘してお

らるのです。

　さらに 47 節では次のように言われています。
「そして、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」
　彼らは「やもめの家を食い物にしている」とイエス様から非難されています。これが具体的にどのようになされていたのかはっきりとはわかりません。いくつかの可能性が提案されています。一つは当時の律法学者には「法律の専門家」としての役割、今でいう弁護士のような役割もあったので、夫に先立たれたやもめの財産を管理する立場に着き、その報酬をやもめから不当に多く取っていたということが考えられます。あるいはそのような立場を利用して、やもめの財産を不正に流用し、自分のものにしていた、ということも考えられます。あるいはやもめが律法学者を尊敬して、もてなしてくれることにつけ込んで、結果的にその家の財産を搾取していたということも考えられます。旧約聖書において、やもめや孤児や寄留者というのは社会の中で弱い立場にある人の代表として出てきます。そして神様はそのような人々を苦しめてはならない、搾取してはならないと命じておられます（出 22:21-23、イザヤ 1:17）。律法学者はそのことを当然知っていたはずです。そうでありながら彼らは裏で、人からも見えない仕方で「やもめの家を食い物にしていた」、その財産を搾取し、私腹を肥やしていたのです。イエス様はそのことを見抜き、非難されているのです。
　さらに彼らは「見せかけの長い祈りをする」と言われています。やもめの家で、自分の信仰深さをアピールするために長く祈っていたのかもしれません。またマタイ福音書 6 章 5 節でイエス様は次のようにおっしゃっています。
「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。」
　彼らは人から自分が信心深い者だと思ってもらうために、多くの人がいる前で長い祈りをしました。それは真実に神に祈っているのではなく、人に見せるため、聞かせるためのパフォーマンスとしての祈りでした。イエス様はそのような偽善、偽りの敬虔を批判されたのです。そして最後に次のように言われました。
「このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」
　律法学者たちのようにうわべを取り繕えば、人からは誉れと称賛を得られるかもしれません。しかし、神様からは誉れどころか、「人一倍厳しい裁きを受けることになる」とイエス様は言われるのです。それは神様が人のうわべではなく、その内面、心の中をも見抜き、知っておられるからです（ルカ 16:14）。律法学者のように人からの誉れを求め、うわべだけよく見せ、裏では弱いやもめを食い物にしているような者は、神様からより一層厳しい裁き、有罪判決を受けることになるのです。それゆえに、そのような振舞い、生き方に陥ってしまわないように気を付けなさい、注意しなさいとイエス様は教えてくださっています。

②そのような生き方に陥らないために

　ではそのような生き方に陥ってしまわないためにどうすればよいのでしょうか。まず自分もそのような生き方に陥ってしまう危険、可能性があるということをしっかりと認識するということが必要でしょ

う。ルカ福音書 9 章 46 節にあるように、イエス様の弟子たちも「自分たちのうちで誰がいちばん偉いかという議論」をしていました。弟子たちもまた、お互いを比較し、評価し合い、自分が人よりも上に立ちたい、誉れある地位に着きたいと願っていたのです。それは律法学者たちが会堂や宴会で上席に着くことを好んだことと根本的には同じです。そして私たちのうちにもそのような傾向がないか自らに問うてみる必要があります。誰だって人から褒められたり、称賛されたり、尊敬されたりすればうれしいのではないでしょうか。それ自体は自然なことでしょう。しかし人からの誉ればかりを追い求めていくとき、結局は自分のうわべだけを取り繕う偽善的な生き方になってしまうのです。

ではそれを防ぐためにどうすればよいのでしょうか。律法学者たちの問題の根底には、彼らが人の目ばかりを気にしていたということがあるのだと思います。ですから彼らは人の目につく「長い衣」を着て歩き回りたがりました。また多くの人々が見ている広場で「先生」と挨拶されることを好んだ。そして会堂や宴会に集う人々の前で最も上位の席、名誉ある席に着くことを好みました。尊敬をもって人から見られるのがうれしかったのです。そして人から「信仰深い人」として見てもらえるように、「見せかけの長い祈り」をしたのです。逆に人が見ていないところでは、やもめの家を食い物にしていた。結局彼らは自分が人からどう見られるかばかりを気にして生きていた。そして自分が名誉と利益を得られるように生きていたのです。しかしそういう生き方は神様の前には通用しません。先ほど申し上げたように、神様は人の外側だけではなく、人の内面、心の中をも見られるからです。イエス様が指摘しておられるように、その人が何を求め、何を好み、何を喜びとしているのか。どのような目的、動機でそれを行なっているのか。そういうことまで神様はご覧になり、そのことに基づいて裁きを下されるのです。私たちは人からの目線ばかりを気にするのではなく、そのような神様の目線があることを覚え、神様の御前を生きていく必要があるのです。

そのように神様の御前に生きた典型的な人物として使徒パウロを挙げることができるでしょう。パウロは第一コリント４章１節から５節で次のように語っています。可能な方はお開きください。新約聖書の 303 ページです。

「こういうわけですから、人はわたしたちをキリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者と考えるべきです。 4:2 この場合、管理者に要求されるのは忠実であることです。 4:3 わたしにとっては、あなたがたから裁かれようと、人間の法廷で裁かれようと、少しも問題ではありません。わたしは、自分で自分を裁くことすらしません。 4:4 自分には何もやましいところはないが、それでわたしが義とされているわけではありません。わたしを裁くのは主なのです。 4:5 ですから、主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけません。主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます。そのとき、おのおのは神からおほめにあずかります。」

パウロは、自分があなたがたから裁かれようと、人間の法廷で裁かれようと、少しも問題ではないと言い切っています。「わたしを裁くのは主」だからです。そして「主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます」。そして主から委ねられたものを忠実に管理し、用いた者は、「そのとき、おのおの神からおほめにあずかる」のです。神様から「忠実な良い僕だ。よくやった」（マタイ 25:21）とほめていただけるのです。

私たちは人からの誉れではなく、そのような神様からの誉れを求めて生きていくべきです（ヨハネ

5:44,12:43)。それはわたしたちが神様から委ねられたものを忠実に管理し、用いる生き方であり、神様の栄光を現わす生き方でもあります。パウロは第一コリント 10 章 31 節で次のように勧めています。新約の 313 ページです。
「だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」
　キリストによって救われ、弟子とされた私たちは、自分の栄光のためではなく、神様の栄光を現すためにすべてのことをなすべきなのです。
　では「すべてを神様の栄光を現すためにする」とは具体的にどういうことなのでしょうか。パウロは続く 10 章 32 節から 11 章 1 節で次のように語っています。
「ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、あなたがたは人を惑わす原因にならないようにしなさい。10:33 わたしも、人々を救うために、自分の益ではなく多くの人の益を求めて、すべての点ですべての人を喜ばそうとしているのですから。11:1 わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい。」

　すなわち、すべてを神の栄光のためにするとは、自分の益ではなく他人の益を追い求めて生きることであることがわかります（Ⅰコリ 10:24 参照)。そのことを通して神様の栄光が現れるのです。それはパウロに倣う生き方であり、さらにたどればイエス・キリストに倣う生き方です。イエス・キリストこそご自分の誉れや利益を求めず、他人の利益、すなわち私たちの利益のため、私たちの救いのために生き、そして死んでくださったお方です。キリストは神の御前にへりくだり、十字架の死に至るまで従順に歩み抜かれたのです。そのキリストの御業によってわたしたちは罪赦され、救われました。それゆえにわたしたちは感謝と喜びをもってイエス・キリストの父なる神に栄光を帰して歩むよう促され勧められているのです。
　しかしその一方で私たちの内にはなお肉なる思い、自分の名誉や利益を求めようとする自己中心的な思いがあります。それゆえすべてを神の栄光のために行うことは難しいようにも感じられるのではないでしょうか。確かに私たちはそのような生き方を自分の力ですることはできません。神の御力と聖霊の導きの中でのみそれは可能となります。それゆえ神様への「祈り」が根本的に重要です。律法学者たちも祈っていました、長い祈りをささげていました。しかしそれは「見せかけだけ、うわべだけ」のものでした。それでは意味がありません。必ずしも長々と祈る必要はありません。真実に神様の御前に出て、必要なことを祈ることです。そして私たちが祈るべき大切なことをイエス様は「主の祈り」の中にまとめて教えてくださいました。その第一の祈りは「御名が崇められますように」です。詩編 115 編 1 節には次のような祈りが記されています。お聞きください。
「わたしたちではなく、主よ／わたしたちではなく／あなたの御名こそ、栄え輝きますように／あなたの慈しみとまことによって。」

　私たちもこのような祈りをささげながら、自分の誉れではなく、神の御名の栄光のために生きる者とさせていただきましょう。祈ります。